

国
語

二〇二〇年度

東京純心女子中学校入学試験問題

(一日午前 特待生選抜を兼ねる)

- 一. 解答は解答用紙に記入しなさい。
- 二. 記述問題で字数制限のある場合は、
句読点・記号も一字として数えなさい。
- 三. 問題文は上下二段になっています。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

勇馬は中学三年生。一週間前に、勇馬の姉は生まれたばかりの息子の昴を亡くした。悲しむ姉に、看護師としてさりげなく気配りをしてくれたのが、クラスメートである瀬川万里の母親だ。家族だけのささやかな葬儀を終え、勇馬は修学旅行へと出かける。

一日目の京都。嵯峨野の寺でショックを受けた。寺の境内一帯にこれでもかというほど、小さな石の地蔵が並んでいるのだ。(中略) この世に生を受けることなく死んでいった赤ちゃんたちを弔うためのものだ。中には苔むして、元の石の形さえわからないものまであった。

① こんなにもたくさん赤ちゃんたちが、生きたくても生きられなかったんだ。

昴のちっちゃな足が目の前にちらついて離れない。泣き出してしまつのが怖くて、石の地蔵たちを守るように立っている千手観音の前で、一心に

A。

昴のこと、よろしくお願いします。お願いします。お願いします。

「勇馬、なにやってんだよ。早くこいよ」

② 一志のテンションについていけない。昴のことはいつてないから、しかたないといえはしかたないんだけど……。バスの中でも寺を見物中でもしやべりっぱなし、はしやぎっぱなし。出発時にはアルゴリズム体操までやらされた。

(中略)

おまけに、なぜか近ごろ③3D映像みたいに飛び出して見えるようになった。瀬川万里が、お母さんの一件があるものだから、よけい目についてしかたない。バスの中で、みんながガイドさんの話に笑い転がっていても、一人ガラス窓にはりついて外の景色を見ていたりすると、その横顔がBで、気になつてしかたなかった。

——やっぱり矢吹セナがいなくて、きついんだな。

おれだつていくらうざくても、一志がいなかったら、きつとX。そう思うと、瀬川さんの細い肩を抱いてあげたい衝動にかられ、勇馬は一人赤面した。それなのに、ハイテンションな一志が、

「なあ、なあ、勇馬。変顔こつこやろ」

と、C迫ってくる。ちつ、バスまで隣に座るんじゃないか。少しは物思いにひたらせろよ。おれだつて、考えたいことがあるんだ。でも、そんなこといってもしかたないかと、

「これでどう？」

得意のまぶた返しをして見せたら、受けに受けた。

「ひえー、きつもお」

「勇馬、すげえ。もう一回やって」

うしろの席のやつまで身を乗り出してくるので、よけいに疲れた。勇馬は胸に一つの決意を秘めていた。旅行中、まずは瀬川さんに、「姉ちゃんが病院で、お母さんにお世話になったんだ。ありがとう」ってお札をいう。

それから、「いつも見てるよ。大丈夫だよ」って付け加える。だあー。想像するだけで照れる。だめだ、こっちはきつといえない。だってもしも、「きもい」っていわれたら、それまでだもの。そのくらいだったら、黙ってたほうがまだましだ。

④それでも、と勇馬は自分をプッシュする。おれが生まれた確率が三億分の一だとしたら、今、生きている確率はその何十倍にもなる。だとしたら、瀬川さんと同じ年に生まれて、同じ学校で学んでいる確率なんて、天文学的な数字になるはずだ。

——逃げてばかりじゃ、だめだ。

そうじゃないと、昂に悪い。あのちっちゃな足で死んでいった昂に悪い。やばい。昂を思うと、また泣けてきた。

修学旅行二日目。いよいよ待ちに待った班行動の日。空は青く澄んで、町を取り囲む山の緑とみごとなコントラストを描いていた。

⑤朝から勇馬はそわそわしていた。そわそわしていたのは勇馬だけじゃなかった。いつもクールな日下部さんが、朝食の席で浮かれていた。

「ずーっとあこがれてたんだあ、下鴨神社近くの古本屋。いわばあたしの原点だよ」

身をくねらせ熱弁をふるうが、ほかの三人はすっかりしらけている。そのうえしやべりながら食べるので、ゆで卵をのどに詰まらせて盛大にむせてしまった。隣の瀬川さんが背中をさすって、一生懸命に介抱していた。しっかりと者に見えるのに、日下部さんって意外とおっちょこちよい。⑥こういう発見が

あるところが、修学旅行のおもしろさかもしれないけどね。

四人それぞれが訪れた場所を持ち寄った結果、朝一番は瀬川さんが希望する龍安寺から回ることにした。(中略)

寺の名前がついた小さな駅に降り立つと、大きな石庭の写真の看板が立っていた。

「……この庭が見たかったんだ」

瀬川さんがつぶやいた。

「この庭にはね、十五個の石が配置されてるんだけど、十五個全部見える場所はないんだって」

日下部さんが博識ぶりを披露する。(中略)

庭を見下ろす広い縁側にたたずんで、瀬川さんはじつと石と砂だけの地味な庭を見つめていた。

勇馬のすぐそばで、たぶん個人タクシーの運転手なんだろう、ズラをつけたおじさんが案内中の観光客に得意げに説明している。

「この庭の意味は謎につつまれていて、見る人によって解釈がちがいますが、人の心を表しているという説が多うおますなあ。そして、全部の石が見えへんのは、人の心を全部が全部理解するのはむずかしいことを、わたしらに教えるためやゆうことを聞いたことがあります」

——人の心かあ。

そんなのわかるわけじゃないじゃん。自慢じゃないけど、おれなんか、自分の心

だってわからない。ずつと女子^{*4}ってこえーって思ってたのに、今は瀬川さんを見つめている。⑦そんなわけのわからないもの^{こと}で思い悩む^{なや}の、やめなよ。勇馬は、額にしわを寄せて庭を見つめている瀬川さんに向かって、そうつてやりたかった。

「ここだ！ ここからなら、全部見えるぞ！」

縁側^{えんがわ}を忙しく行ったりきたりして、「一、二、三、四」と石を数え続けていた

一志が、**一**大きな声をあげた。**二**、「しいー。あなた、うるさいです」

と外国人のおばさんに叱^{しか}られていた。

「きて、きて」

とひっぱられて一志のいう場所に立つと、小さなも含めて**三**十五個全部の石が見える。

「瀬川さん、こつち。こつち」

喜ばせようと思つて手招き^{てまね}するのに、瀬川さんは、「ううん、ううん」

と**四**首を振った。そばに寄つてもう一度、

「あつちからなら、十五個全部見えるよ」

と小さくやいても

「い」

と後ずさりする。

「なんで？」

と聞くと、

「全部なんて見えなくていい。わかった気になりたくない」

と、どこか必死のまなざしでうったえられた。

「……………」

ハッとした。

「……………そうだね」

勇馬はそつとため息をもらした。つらさも悲しさも、結局はその人のものではないもんね。姉ちゃんだって……。わかつてあげようなんて、傲慢^{ごうまん}なものも。

⑧もう一度庭に目を戻すと、高くのぼった太陽に照らされて、水紋^{みづずみ}を描いた白砂^{しろすな}が光っていた。

(八束澄子『いのちのパレード』より。なお、本文には省略があります。)

*1 アルゴリズム体操……NHKの教育番組のコーナーで行われる体操。一人だけ

ですと意味のない動きだが、二人ですと意味を持つ不思議な体操。

*2 矢吹セナ……バレーボール部で、セッターの万里は、アタッカーのセナとコンビ

を組んでいた。セナは体調をくずして、学校をずっと欠席している。

*3 ズラ……かつら。

*4 ずつと女子ってこえーって思ってた……クラスの女子が一志を取り囲み、せめた

できごとを指す。

*5 水紋……水面にできる波や渦^{うず}などの模様^{もよう}。

問一 ——線①「こんなにも生きられなかったんだ」とありますが、「勇馬」はどのような情景を見て、このように感じたのですか。次の文の空欄に合うように本文中から十五字以内で抜き出しなさい。

【十五字以内】情景。

問二

A

・

B

・

C

に入る言葉として適当なものを、次のア～エの中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

- A ア 手をかけた イ 手を打った
ウ 手を合わせた エ 手をふった
B ア さびしそう イ きびしそう
ウ なつかしそう エ はずかしそう
C ア いさぎよく イ きびしく
ウ はげしく エ しつこく

問三 ——線②「一志のテンションについていけない」とありますが、「勇馬」は「一志」のどのような行いに「ついていけない」と感じていますか。具体的に説明した一文を本文中から探し、はじめの五字を抜き出しなさい。

問四 ——線③「3D映像みたいに飛び出して見えるようになった」とは、どのようなことをたとえていますか。三十字以内でわかりやすく説明しなさい。

い。

問五

X

に入る適当な言葉を、本文中から三字で抜き出しなさい。

問六 ——線④「それでも、と勇馬は自分をプッシュする」とありますが、ここから「勇馬」のどのような様子が読み取れますか。適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- A この機会に、瀬川さんのお母さんにお世話になったお礼を言おうかどうしようか迷い、自問自答をくり返している。
イ 昴のことを思い、瀬川さんのお母さんへのお礼と、瀬川さんを勇気づける言葉を伝えようと、気持ちを奮い立たせている。
ウ 昴を亡くした悲しみを乗りこえた自分の姿を見せ、瀬川さんを励まさないといけないと、意気込んでいる。
エ これからは、昴のことも瀬川さんのお母さんにお世話になったことも忘れて、みんなとの時間を楽しもうとしている。

問七 ——線⑤「朝から勇馬はそわそわしていた」とありますが、それはなぜですか。解答欄に合うように本文中の言葉を使って二十字以内で説明しなさい。

【二十字以内】から。

問八 ——線⑥「こういう発見」とありますが、「勇馬」は「日下部さん」につ

いて、どのような「発見」をしましたか。次の文の空欄に合うように、本文中の言葉を使って六十五字以内で具体的に説明しなさい。

【六十五字以内】ということを見つけた。

エ 厳しい自然の中で、ひたむきに生きる人の姿は美しいものだ。

問九 — 線⑦「そんなわけのわからないもの」で思い悩むの、やめなよ」について、次の各問いに答えなさい。

(1) 「わけのわからないもの」とは何ですか。本文中から三字で抜き出しなさい。

(2) 「思い悩む」とありますが、「瀬川さん」が「思い悩」んでいることがわかる言葉を、本文中から二十字で抜き出しなさい。

問十 Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳに入る言葉として適当なものを、次の

ア エの中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア なるほど イ とつぜん ウ たちまち エ しきりに

問十一 — 線⑧「もう一度く白砂が光っていた」とありますが、「勇馬」はこの情景を、どのような思いで見ていると考えられますか。適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 悲しみやつらさを抱えて生きて生きる人たちの生は、その人だけのものだ。

イ 雄大な自然の営みにくらべれば、人のいのちははかないものだ。

ウ 悲しみやつらさを乗り越えて、強く生きていきたいものだ。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

視覚障害者用の誘導ブロックと同様、最近では、駅やAコウキョウ性の高い建物へのエレベーターの設置がすすんできました。むしろ、バリアフリーといえ、こちらをまず思い浮かべる人のほうが多いかもしれません。

エレベーターの必要性は、たいていの場合、つぎのような論理で語られます。人はふつう、階段の昇り降りに不自由のないからだをもっている。

A、なかにはそれができない人たちがいる。手術をしたり、訓練をしたりすることで、その人が自分の足で階段を昇り降りできるようになればそれに越したことはない。けれど、残念ながら現在の医療Bギジュツでは、すべての人の足を治すことはできない。だからといって、ほったらかしにしておくのはまずいだらう。だったら、エレベーターをつけることで対応しよう。

①この考え方はわかりやすいですね。視覚障害者がホームから転落することを防止するための手段についても、おなじような発想から語られるのが一般的かと思えます。本当は、目を見えるようにするのが一番なんですけど、それが無理だから、かわりに誘導ブロックとかホームドアを設置するんだと。

要するに、足が動けばいい、目が見えるようになればそれがベストのCカイケツ策だということですね。足が不自由だからこそ、目に障害があるからこそ問題が生じるのだ、言い換えるなら、ふつうでないからだにこそ原因がある

んだ、ということですよ。

一見、②理にかなった見方のようだし、実際、多くの人はそんなふうに見えると思うんですけど、③これって本当なんでしょうか。ぼくには、どうもちがうように思えるんですよ。

(中略) 想像してみてください。B、すべての住人が、背中にペガサスのような翼をもっている社会があったとしたらどうでしょう。

たぶん、この社会には階段なんてものはないと思うんですよ。だって、みんな羽をもっているわけだから、バタバタとひと飛びすれば、好きな階に行くことができる。えっちらおっちらと一段ずつ歩を運んだりという面倒なことをする必然性がありません。窓を大きく開いておくなり、床から天井に抜けて翼を広げた人間が通れるだけの穴を空けておけばいいだけです。

だけど、④もしこの社会にあなたが投げ込まれたらどうなるでしょう。(中略)

翼をもたないあなたが、この社会にくらすのはきつと大変でしょうね。なにせ、上下の階への移動手段がないんですから。鳥人間たちに手伝わってもらわれない限り、あなたは目的の階へ移動することができません。C、いま現在の社会では「健常者」であったとしても、鳥人間たちの社会に引越したとたん、あなたは「障害者」となるわけです。

このように、なにが「ふつう」であり、誰が「健常者」であるかは、実は絶対的なものではなく、相対的に決まるものなんです。ぼくたちのくらす社

会では、階段はあることが「ふつう」であり、階段を昇り降りできるからだが「そが」「ふつう」のからだということになっているけれど、鳥人間たちの社会では、階段はないことが「ふつう」であり、階段などなくても上下階への移動に支障のないからだこそが「ふつう」のからだであるとされるわけです。

これを、車いすの人と自分の足で階段の昇り降りができる人との関係に置き換えてみるとどうなるでしょう。

車いすの人が上下階への移動に困難をおぼえるのは、現在の社会では、自分の足で階段を昇り降りできることが「ふつう」であると同提され、そのために、階段があることは「ふつう」であっても、エレベーターやスロープは、特に設置されていなくても「ふつう」と考えられているためです。

だけど、もし今後、⑤バリアフリーの考え方がもつとつと社会に浸透して、階段だけでなく、すべての建造物にはエレベーターやスロープがあるのが「ふつう」という状況じょうきょうになったら、Dジタイじたいはずいぶんと変わりますよね。上下階への移動に関する限り、車いすに乗っているということはなんら問題ではなくなる。

階上や階下への移動に階段も利用するか、エレベーターやスロープだけを利
用するかのがいがあるだけで、健常者と車いす利用者との関係は、一方が「ふつう」でもう一方は「ふつうでない」といったような非対称ひたいしやうなものではない
るはずです。

もしかすると、実際には逆で、どちらかが「ふつう」でどちらかが「ふつうでない」という見方がなくなったとき、はじめてバリアフリーが社会のあらゆる

るEリョウイキえりょういきに浸透するのかもしれませんが。まあ、このへんは、⑥「」が先か「」が先かといった議論とおなじく、どちらが先ということではなく、相互そうじに影響えいきやうし合いながら、すすんでいくものなんだろうと思います。

ともあれ、障害者の経験する困難の原因は、通常考えられているように、手足が動かなかつたり、目が見えなかつたりすることからたらされるわけではないということ、いま信じられている「ふつう」は必ずしも絶対的なものではなく、⑦それはまったく異なった「ふつう」があり得るということ、そのもとでは、いま「障害者」とされている人間が障害者でなくなったり、逆に「健常者」とされている人間が「障害者」になってしまうという可能性もあるんだということ、ここでは押さえておいてください。

（倉本智明『だれか、ふつうを教えてください！』より）

なお、本文の表記は原文のままであり、省略があります。

ア 前半では、バリアフリーに対する現状を説明し、それに対する対応策について具体例を用いて説明している。後半では、車いすを使用する人の視点で考え直し、バリアフリーについての筆者の考えを述べている。

イ 前半では、障害について一般的な考え方を示し、それに対する別の視点を架空かくうの例を用いて説明している。後半では、架空の例を現実に当てはめて考え直し、障害についての筆者の意見をまとめている。

ウ 前半では、障害についての一般的な考えを示し、その考えを否定するために架空世界の例を取り上げている。後半では、現在の障害に対する考えを再検討し、障害についての定義を改めている。

エ 前半では、バリアフリーについての一般的なとらえ方を説明し、その具体例を架空の世界を用いて説明している。後半では、架空世界の例を現実に当てはめて考え直し、筆者の主張につなげている。

問十 線A「コウキョウ」・B「ギジュツ」・C「カイケツ」・D「ジタイ」・

E「リョウイキ」をそれぞれ漢字に直しなさい。

